

捨てられない山道具

白山書房『山の本』2022年春号 (No. 119) に、「私の捨てられない山道具」という特集が掲載されており、10人近い執筆者が若かりし頃に使った木製シャフトのピッケル、アイゼン、ワカン、登山靴、テント、ストーブ、ザックなどそれぞれご自分の宝物の山道具を開陳しておられる。何れも現在では全く姿を消した山のギアであるが、往時を知る同年代の同輩としてはいずれも懐かしい代物であった。

小生も、昔懐かしい山道具についてはこのHPの「山道具今昔」のページに掲載しているが、その実物の“お宝”断捨離については苦労しているところである。住処がウサギ小屋なので山岳博物館よろしく棚などに飾っておくスペースもなく、ダンボール箱に入れて押し入れの中の一番奥の下隅に積んであるだけだから何十年間も陽の目を見る機会もなく、埃と黴にまみれているのが気の毒である。

所属する山の会で数年間に一度くらいは山道具リユース・バザールを行なうので、未だ他の人の使用のお役に立つ物は出品して使って貰っているが、古くなった道具やサイズが合わないと使えない山靴やフットギア類、身に付ける山の衣類、安全性保持に問題があるかもしれないクライミング・ギア類はリユースには向かないので、これらの処分が頭が痛いところである。

夫々の道具は半世紀以上前の若い頃に安月給の中から無理をして大枚？を叩いて購入した道具たちであるから、往時の山行の思い出などがギッシリ詰まっていて捨てがたいシロモノではある。しかしながら、このような感懐は本人だけのもので家族にとっては単なる邪魔な塵（ガラクタ）にし過ぎないから、本人が未だ処分できる内に綺麗サッパリ跡形も無く消しておかないといけない。

リユース・バザールに出せる物は出し、未だ使えるギア類は現役の山友達に差し上げたりしたが、どうにも持って行きどころが無いギア類などの処分には全くアタマが痛い。

市役所のゴミ集荷に出すとしても、例えばの話、ハーケン、カラビナ、ユマール、カム・ナッツ類、ピッケル、アイゼンなどの金物はいかなる種類のゴミで集荷して貰えるのか。昔のピッケルはウッドシャフトであるから“木材”として出すのか或いは“金属”として出せば良いのか？

クイックドロワーは、クライミング・ロープは？ ホエーブスなどのガソリンバーナーは？

シュラフも高所極地用のダウン・シュラフの高級シュラフをシュラフ専門店でクリーニングして貰ったのが帰ってきたままで押し入れの隅に放り込んであるのだが、やはり身に付けるものは他人様に差し上げるのは些か憚られるのである。かなり高価だったダウン製のオーバーズボンもある。

かって何年か前に、これらのギア類を纏めて某出身大学の山岳部に寄付しようとしたことがあったが、残念ことに山岳部は部員ゼロになって閉部となっていた。

それにしても、山道具の進歩は質量共に尋常ではなく、山道具メーカーや販売店の“販売戦略”に踊らされて昨年新発売の山用品が今年になるともう定番から外されるという寸法である。従って、高価な道具であっても単なる「使い捨て」が常識となるので、何回も修理して使っている間に持主の身体の一部になったように馴染んで来るといような塩梅ではなくなってきた。

確かに、例えば登山靴で言えば、かつての革製の山靴に較べて現代のフット・ギアと称されている新素材の登山靴は軽くて暖かくて履きやすい。またウエアの類も同様である。クライミング・ロープもかつては重くて太くて短い太さがφ14mmもあるゴワゴワの麻縄であったものが、今ではφ9mm程度

の軽くてしなやかなナイロン製に変化している。バーナーもガソリンや石油用は姿を消し、ガスバーナーが専らである。テントもかつての雪山用はグラスファイバーポールの重いカマボコ型が主流であったものが、今では軽いドーム型が主流となっている。

事ほど左様ではあるが、昔の道具も今のギアもそれぞれ性能は変わってきているが、機能は基本的には変わっていない。性能は進歩しているが登山靴は登山靴の域を出ず、また、昔のウッドシャフトの長尺物のピッケルも今のカマキリ型のアイスクライミング用アックスも機能面では根本的な差異は無い。ワカンにしてもワッカの材質がクロモジの木製から金属パイプに変更されただけで、機能面では同じである。

そのような中で、今は全く姿を消した山道具が二、三ある。一つは、オーバーシューズと呼ばれた物で、今のロングスパッツが膝だけでなく靴もスッポリと覆うようになっている代物であった。

当時は布地が綿だったので雪に濡れてバリバリに凍ることも多かったが、靴を覆っている部分はしっかりしていたので靴が雪で濡れたり凍結したりすることは無く、これはスグレ物であった。防水液も発売はされていたかもしれないが高価であったので防水のために布地にローソクを塗ったりアマニ油を塗ったりした。

このオーバーシューズのアイデアは現在にも伝えられていて、登山靴とスパッツが一体となった「ゲイター・シューズ」として復活している。

消えた道具はその他には、尻皮と軍隊式の飯盒であろうか。尻皮は現在でも山伏が腰からぶら下げているが、登山者がこれを使っていると皆から非難の眼で見られ、また動物愛護協会から訴えられるかもしれない。性能面から言えば、ムジナの皮が最高級品であったが、これは高価でまた鞣し方が悪いと毛が抜けたりしたが、我々貧乏人は安価なニュートリアの皮を買ってきて自作したものだった。



(カマボコ型冬天)



(オーバーシューズ)



(尻皮)

(2022年5月 記す)